



現代の文学 = 3

佐藤春夫集



田園の憂鬱  
晶子曼陀羅  
小説智恵子抄  
旅びと  
日照雨  
愛猫知美の死  
詩抄

河出書房新社

現代の文学 3 佐藤春夫集

春夫

© 1966

責任編集

川端康成 丹羽文雄  
円地文子 井上靖  
松本清張 三島由紀夫

---

昭和 41 年 1 月 1 日 初版印刷  
昭和 41 年 1 月 8 日 初版発行

定価 390円

著者 佐藤春夫  
発行者 河出朋久  
印刷者 高橋武夫  
装幀 原弘(N. D. C)

印刷・大日本印刷株式会社  
本文用紙・本州製紙株式会社  
函貼・神崎製紙(ミラーコート)  
同納入・東邦紙業株式会社  
クロース・日本クロス工業株式会社  
同納入・株式会社小島洋紙店

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社  
神田小川町三の六

電話東京 (292) 大代表3711  
振替口座 東京 10802

---

製本・小高製本工業K・K

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

田園の憂鬱	三
晶子曼陀羅	八
小説智恵子抄	三三
旅びと	三九
日照雨	三五
愛猫知美の死	三九
詩抄	四二



佐藤春夫集



田園の憂鬱



*I dwell alone*

*In a world of moan,*

*And my soul was a stagnant tide,*

*Edgar Allan Poe*

私は、呻吟の世界で

ひとりで住んでいた。

私の霊は滯み腐れた潮であった。

エドガー アラン ポオ

その家が、今、彼の目の前へ現われてきた。

初めのうちは、たいへんな元気で砂ぼこりを上げながら、主人の後になり前になりして、飛びまわり纏わりついていた彼の二足の犬が、ようよう柔順になって、彼のうしろに、二足並んで、そろそろ随いてくるようになってきた頃である。高い木立の下を、路がぐつと大きく曲った時に、

「ああや々と来ましたよ」

と言いながら、彼らの案内者である赭毛の太っちょの女が、片手で日にやけた額から滴り落ちる汗を、汚れた

手拭で拭いながら、別の片手では、彼らの行く手の方を指し示した。男のように太いその指の尖を伝うて、彼らの瞳の落ちたところには、黒っぽい深緑のなかに埋もれて、目眩しいそわそわした夏の朝の光のなかで、鈍色にどっしりと或る落着きをもって光っているささやかな萱葺の屋根があった。

それが彼のこの家を見た最初の機会であった。彼と彼の妻とは、その時、おのおのこの草屋根の上にさまよっていた彼らの瞳を、互いに相手のそれの上に向けて、瞳と瞳とで会話をした——

「いい家のような予覚がある」  
「ええ私もそう思うの」

その草屋根を見つめながら歩いた。この家ならば、いつか遠い以前にでも、夢にであるか、幻にであるか、それとも疾走する汽車の窓からでもあったか、何かで一度見たことがあるようにも彼は思った。その草屋根を焦点としての視野は、実際、どこでも見出されそうな、平凡な田舎の横顔であった。しかも、それがかえって今の彼の心をひきつけた。今の彼の憧れがそんなところにあったからである。そうして、彼がこの地方を自分の住家に択んだのも、またこの理由からにほかならなかつた。

広い武蔵野がすでにその南端になつて尽きるところ、それがようやくに山国の地勢に入ろうとする変化——い

わば山国からのかすかな余情をたえたエビロオグであり、やがて大きな野原への波打つプロオグでもあるこれらの小さな丘は、目のとどくかぎり、ここにも起伏して、それが形造るつまらぬ風景の間を縫うて、一筋の平坦な街道が東から西へ、また別の街道が北から南へ通じているあたりに、その道に沿うて一つの草深い農村があり、幾つかの卑下へりくだった草屋根があつた。それはTとYとHとの大きな都市をすぐ六七里の隣りにして、たとえば三つのはげしい旋風の境目にできた真空のように、世紀からは置きっぱなしにされ、世界からは忘れられ、文明からは押し流されて、しょんぼりと置かれていたのであつた。

いったい、彼が最初にこんな路の上で、限りなく楽しみ、また珍しく心のくつろいだ自分自身を見出したのは、その同じ年の暮春の或る一日であつた。こんな場所ところにこれほどの片田舎があることを知って、彼はまず驚かされた。しかもその平靜な四辺あちりの風物は彼に珍しかつた。ずっと南方の或る半島の突端あしに生れた彼は、荒い海と峻げんしい山とが激しく咬み合つて、その間で人間が微小にしかし賢明に生きている一小市街の傍を、大きな急流の川が、その上に筏いかだを長々と浮べさせて押し合ひながら荒々しい海の方へひしめき合つて流れてゆく彼の故郷のクライマックスの多い戯曲的な風景にくらべて、この丘

つづき、空と、雑木原と、田と、畑と、雲雀ひばりとの村は、実に小さな散文詩であつた。前者の自然は彼の峻厳げんげんな父であるとするれば、後者のそれは子に甘い彼の母であつた。「帰れる放蕩息子ほうとうしこ」に自分自身をたとえた彼は、息苦しい都会の真中であつて、柔かに優しいそれ故に平凡な自然のなかへ、溶け込んでしまいたいという切願を、かなり久しい以前から持つようになっていた。おおいそこにはクラシックのような平靜な幸福と喜びとが、人を待っているにちがいない。Vanity of vanity, vanity, all is vanity! 「空の空、空の空なる哉都みやこて空なり」或はそうでないにしても……。いや、理屈は何もなかつた。ただ都会のただ中では息がつまつた。人間の重さで圧しつぶされるのを感じた。そこに置かれるには彼はあまりに鋭敏な機械だ、そこが彼をいやがうえにも鋭敏にする。そればかりではない、周囲の騒がしい春が彼を一層孤独にした。「ああ、こんな晩には、どこでもいい、しつとりとした草葺くさまの田舎家のなかで、暗い赤いランプの陰で、手も足も思うぞんぶんに延ばして、前後も忘れる深い眠に陥入おちこつて見たい」という心持が、華やかな白熱燈の下を、石甃いしぞうの路の上を、疲れ切つた流浪人ろうぼうじんのような足どりで歩いている彼の心のなかへ、せつなく込み上げてくるのが、まことにしばしばであつた。「おおい深い眠、おれはそれを知らなくなつてからもう何年にな

るであらう？ 深い眠！ それはいわば宗教的な法悦だ。

おれの今最も欲しいのはそれだ。熟睡の法悦だ。すなわち肉体がほんとうに生きている人の法悦だ。俺はまずそれを求める。そののある処へ行こう。さあ早く行こう！」彼は自分自身の心のなかでそう呟いた。或は、口に出してさえ呟いた。そうして矢も楯もたまらない、郷愁に似たような名づけようのない心が、その何処とも知れない場所へ、自分自身を連れて行けとせがむのであった……。(彼は老人のような理智と青年らしい感情と、それに子供ほどの意志とをもった青年であった。)

その家が、今、彼の目の前に現われてきたのである。

道の右手には、道に沿うて一条の小渠があった。道が大きく曲れば、渠もそれについて大きく曲った。そのなかに水は流れてゆき流れてくるのであった。雑木山の榎や、柿の樹の傍や厩の横手や、藪の下や、桐畑や片隅にぽっかり大きな百合や葵を咲かせた農家の庭の前などを通じて。幅六尺ほどのこの渠は、事實は田へ水を引くための灌漑であつたけれども、遠い山間から来た川上の水を真直ぐに引いたものだけに、その美しさは溪と言いたいような気がする。青葉を透して降りそそぐ日の光が、それを一層にそう思わせた。へどろの赭土を洒して、洒し尽して何の濁りも立てずに、浅く走ってゆく水は、時々ものに堰かれて、ぎらりぎらりと柄になく閃いたり、そ

うかと思うと縮緬の皺のように繊細に、或は或る小さなびくびくする痙攣の発作のように光ったりするのであった。或は、その小さな輝きが魚の鱗のように重り合っているところもあった。涼しい風が低く吹いて水の面を滑る時には、そこは細長い瞬間的な銀箔であつた。薄だの、もう夙くにあの情人にものを訴えるようなセンチメンタルな白い小さい花を失つた野茨のひとかたまりの藪だの、その外、名もないしかしそれぞれの花や実を持つ草や灌木が、渠の両側から茂り合いかぶさりかかる、水はそれらの草のトンネルをくぐった。そうしてその影を黒く涼しく浮べては、ゆらゆらと流れ去った。或る時には、水はゆつたりと流れ淀んだ。それは旅人が自分の来た方をふりかえつて佇むのに似ていた。そんな時には土耳其玉のような夏の午前の空を、土耳其玉色に——或は側面から透して見た玻璃板の色に、映しているのであった。快活な蜻蛉は流れと微風とに逆行して、水の面とすれすれに身軽く滑走し、時々その尾を水にひたして卵をそこに産みつけていた。その蜻蛉は微風に乗って、しばらくの間は彼らと同じ方向へ彼らと同じほどの速さで、一行を追うように従うていたが、何かの拍子についと空ぎまに高く舞い上った。彼は水を見、また空を見た。その蜻蛉を呼びかけて祝福したいような子供らしい気軽さが、自分の心に湧き出るのは彼は知った。そう

してこの楽しい流れが、あの家の前を流れているであろうことを想うのが、彼にはうれしかった。

はげしい暑さは苦しい、楽しい、と表現しようとして木の葉の一枚一枚が宝玉の一断面のように輝くと、それらの下から蟬は焼かれているように呻いた。灼けた太陽は、空の真中近く昇ってきていた。しかし、彼の妻は、暑さをさほどには感じなかった。しかし、彼の妻から暑さを防いだものは、その頭の上の紫陽花色に紫陽花の刺繡のあるバラソール——貧しい婦の天蓋——ではなかった。それは彼の女の物思いであった。彼の女は今歩きながら考えふけている、暑さを身に感じる閑もないほど。彼の女は考えた——そうすれば今間借りをしている寺のあの西日のかつと射し込む一室から涼しいところへ脱れられる。それよりもあの下卑た俗悪な慾張りの口うるさい梵妻の近くから脱れられる。そうして、静に、涼しく、二人は二人して、言いたいことだけは言い、言いたくないことはいっさい言わずに暮したい住みたい。そうすれば、風のように捕捉しがたい海のように敏感すぎるこの人の心持も気分も少しは落着くことであろう。あれほどの意気込みで田舎を懂れてきながら、わずかながらもわざわざ買ってもらった自分の畑の地面をどう利用しようなどと考えているでもなく（それはもとよりそうであるうとは思ったけれども）それよりも本一行見るではなく

字一字書こうとするでもなく、何一つ手にはつかぬらしい。そうしてもしそんなことでも言い出せばきつとどなりつけるにきまっている、それでなくてさえも、もう全然だめなものと見放されている——わけて自分との早婚すぎるむりな結婚の以後は、ことにそう思われているらしい父母への心づかいもなく、ただうかうかと——ではないとあの人自身では言っても、とにかくうかうかと、その日その日の夢を見て暮しているのである。いつ、建てるものともない家の図面の、しかも実用的というような分子などは一つもないものを何枚も何十枚も、それは細かく細かく描いているかと思うと、不意に庭へ飛び出して、犬の真似をして犬と一緒になつて、燃えている草いきれの草原を這ったり駆けまわったり、そうかと思ふと突然破れるような大声で笑い出したり叫び出したりするこの人は、ほんとうに何か非常に寂しいのである。何事も自分には話してくれはしないから解るはずもない。何か自分には隠しているのではなからうか……。

彼の女は、五六日前に読みおわった藤村の「春」を思い出した。単純な彼の女の頭には、自分の夫の天分を疑うてみるなどとは知らずに、自分の夫のことをその小説のなかの一人が、自分の目の前へ——生活の隣りへ、その本のなかから抜け出してきたかのようにも思ってみた……。あれほど深い自信のあるらしい芸術上の仕事など

は忘れて、放擲して、ほんとうにこの田舎で一生を朽ちさせるつもりであろうか。この人は、まあ何という不思議な夢を見たがるのであろう……。それにしても、この人は、他人に対しては、それは親切に、優しく調子よくしながら、なぜこうまで私には気難かしいのであろう。もしや、あの人のある女に対する前の恋がまだ褪せきらない間に、私はあの人の胸のなかへはいって、そのためにあの人はしばらくはあの女を忘れてはいたけれど、根強く残っていたあの恋がいつの間にか再び自分のけものにしてまた芽を出したのではなからうか。そうして私には辛くあたる……。今のままでは、さぞかし当人も苦しいであろうが、第一そばにいろものがたまらない。返事が気に入らないといつては転ぶほど突きとばされたり、打たれたり、何が気に入らないのか二日も三日も一言も口をきこうとはしなかったり……。あの人はきつと自分との結婚を悔いているのだ。少くとももし自分とではなく、あの女と一緒に住んでいたならばどんなに幸福だったろうかと、時々、考えるにちがいない。考えるばかりではない、現に、自分にむかってそう言つたことさえある——「あの時、おれがあの人、あの純潔な素直な娘と一緒になれさえしたならば、あの人を私をよく統一して、おれは今ごろ、いろいろな意味でもっと美しいもつと善い生活ができていただろう」と……。実際

あの女は、自分も知っているけれども、自分などよりはもつと美しく、もつと優しい。私はあの人があの人をどんなに深く思っているかはよく知っている……。いや、いや、そうではない。あの人はやっぱりあの人自身で何か別のことを考え込んでいるのである……。そうだ、夫は、「ただ、私をそつとしておいてくれ」と言つた……

ふと、

「俺には優しい感情がないのではない。俺はただそれを言い現わすのが恥しいのだ。俺はそういう性分に生れつゝいたのだ」

彼の女は、昨夜、いつになく打ち解けて彼が語つた時、彼の女にむかつて言つた彼の女の夫の言葉を思い出すと、その言葉を反芻しながら歩いた。そうしてまだ見たことのない家の間どりなどを考えた。たとい新婚の夢からはとづくに覚めたころであつても、こんな暑さの下でも、ただ単に転居するというだけの動機で心持がふだんよりもずつと活き活きとしてきて、こんなことを考へて悲しんだり、喜んだり、慰んだりすることのできるのには、まだ世の中を少しも知らない幼妻の特権であつたからだ。そうしてそれがまた、あの案内の女が、しゃべりつづけにしゃべっているその家の由来について、何の興味も持たぬらしく、ただ無愛想に空返事を与えているにすぎなかつたゆえんである。——この案内の女



は、その長い暑苦しい道の始終を、ながながとしゃべりつづけて休まなかった。この女は自分の興味をもっているほどのことなら、他の何人にとつても、非常に面白いのが当然だと信じている単純な人々の一人であつたから。

こんな道を、彼らは一里近くも歩いた。

そうしてその家は、もう、彼ら一同の目の前にきていた。

家の前には、はたして渠が流れていた。一つの小さな土橋が、茂るがままの雑草のなかに一筋細く人の歩んだあとを残して、その上を歩く人々に、あの幅一間あまりの渠を越させて、人々をその家の入口へ導く。

入口の左手には大きな柿の樹があつた。そうして奥の方にもあつた。それらの樹の自由自在にうねり曲つた太い枝は、見上げた者の目に、「私は永い間ここに立っている。もう実を結ぶことも少くなつた」とその身の上を告げているのであつた。その老いた幹には、大きな枝の脇の下に寄生木が生えていた。その樹に対して右手には、その屋敷とそれの地つづきである桐畑とをくぎつて細い溝があつた。何の水であろう。水が溜れて細く——その細い溝の一部分をなお細く流れて男袴よりもっと細く、水はちよろちよろ喘ぎ喘ぎ通うていた。じめじめとした場所を、一面に空色の花の月草が生え茂つていた。また子供たちが「こんべとう」と呼んでいるその菓

子の形をした仄赤く白い小さな花や、また「赤まんま」と子供たちに呼ばれている野花なども、その月草に雑つて一帯にはびこつていた。それはなつかしい幼な心をよびさます叢であつた。昼間は螢の宿であろう小草のなかから、葉には白い豎の縞が鮮に染め出された蘆が、すらりと、十五六本もひとところに集つて、爽やかな長いそのうへ幅広な葉を風にそよがせて、ざわざわと音をたてているのであつた。屋敷の奥の方から流れ出てきた水は、それらの小草の茎をくぐつて、それらの蘆の短い節を洗いきよめながら、うねりうねつて、解きほぐした絹糸の束のようにつやつやしく、なよやかに揺れながら流れた。そうして、か細く長々しい或る草の葉を、生えたままで流し倒して、その草のために一時流動することさええざられたそれらのささやかな水は、その草の葉を伝うて、より大きな道ばたの渠のなかへ、水時計の水のようにぼたりぼたりと落ちそそいでいた。彼にはこの家の屋後に、湧き立つ小さな清新な泉がありそうにも感ぜられた——そういう地勢でもあつたから。

家の背後は山つづきで竹藪になつていた。竹のなかにはすばらしく大きな丈の高い椿が、この清楚な竹藪のなかの異端者のように、重苦しく立っていた。屋敷の庭は丈の高い——人間の背丈よりも高くなつた楠の生垣で取り囲まれてあつた。家全体は、指顧の遠さで見た時にそ

うであつたごとく、目の前に置かれてみても、茂るにまかせた樹々の枝のなかに埋められて、茂るにまかせた草の上に置かれてあつた。

犬は一足づつ土橋の側から下りていって、灌水の水を交々に味うた。

彼はその土橋を渡ろうともせず、「三徑就荒」と口吟みたいこの家を、思いやり深そうにしばらく眺めた。

「ねえ、いいじゃないか、入口の気持が」

彼はこの家の周囲から閑居とか隠棲とかいふ心持に相応した或る情趣を、幾つか拾い出しえてから、妻にむかつてこう言つた。

「そうね。でもずいぶん荒れていること。家のなかへはいつてみなければ……」

彼の妻は少々不安そうに、またさかしげに、気まぐれな夫をたしなめる時にすべての妻がする口調をもつてそう答えた。しかし、すぐ思いかえして、

「でも、今のお寺に居ることを思えば、どこだつていいわ」

今飲んだ水から急に元気をえた二疋の犬は、主人達よりも一足さきに庭のなかへ跳り込んだ。松の樹の根元の濃い樹かげを挟んだ二疋の犬どもは、わがもの顔に土の上へ長々と身を横えた。彼らは顔を突き出して、下顎から喉首のところを地面にべったりと押しつけ、両方から

同じ形に顔を並べ合つた。そうして全く同じような様子に体を曲げて、後脚を投げ出した様子は、まことに愛らしいシンメトリーであつた。赤い舌を垂れて、苦しげな息を吐き出しながら、庭にはいつてきた彼らの主人達の顔を無邪気な上眼で眺めて、静かに楽しそうに尾を動かしてみせた。いかにも落着いたらしいその姿は、ここがもう自分たちの家だということを、彼らの主人たちよりさきに十分に予覚しているらしいようにも、彼には見られるのであつた。もしこの時、妻が彼のそばにいたならば彼は妻にこう言つたらう——

「ね、フラテもレオ（二つとも犬の名）も賛成しているよ」

けれども彼の妻は、案内の女と一緒にその縁側の永い間閉ざされていた戸を開けようとして、鍵で鍵穴をがたがたいわせている。

樹という樹は茂りに茂つて、緑は幾重にも積み重つた。錯雑した枝と枝とは網の目になり壁になり軒になつて、庭はほとんど日かげもさし込まなかつた。土の匂は黒い地面から、冷々と湧いてきた。彼は足もとから立ちのぼるその土の匂を、香を匂う人のように官能を尖らかせてしみじみと味うてみた——じゃらじゃらと涼しく音を立てていた鍵束の音がやまって、縁側の戸が開けられるまで。



\* \* \*

「やっと、家らしくなった」

昨日、門前で洗い淨めた障子を、彼の妻は不慣れな手つきで張つたのである。最後の一枚を張りおわつた時、それを茶の間と中の間のあいだの敷居へ納めようとして立っている夫の後姿を見やりながら、妻は満足に輝いてそう言った。

「やっと家らしくなった」彼の女は同じことを重ねて言った。「畳はすぐかえに来るといふし……でも、私はほんとうに厭だつたわ、おとつい初めてこの家を見た時にはねえ。こんな家に人間が住めるかと思つて」

「でも、まさか狐狸の住家ではあるまい」

「でもまるで浅茅が宿よ。でなきや、こおろぎの家よ。あの時、畳の上一面にびよんびよん逃げまわつたこおろぎはまあどうでしょう。恐いほどでしたわ」

「浅茅が宿か、浅茅が宿はよかつたね。……おい、以後この家を兩月草舎と呼ぼうじゃないか」

「彼ら二人は——妻は夫の感化を受けて、上田秋成を讚美していた」

夫の愉快げな笑い顔を、久しぶりに見た妻はうれしかった。

「そこで、今度は井戸換えですよ、これが大変ね。一年

もまるで汲まないというのですもの、水だつてたいがい腐りますわねえ」

「腐るとも、毎日汲み上げていなければ、俺の頭のように腐る」

この言葉に、「またか」と思つた妻は、今までののはしやいだ調子を忘れておずおずと夫の顔を見上げた。しかし夫の今日の言葉はただ口のさきだけであつたとみえて、その骨ばつた顔にはもとのままの笑があつた。それほど彼は機嫌がよかつたのである。それを見て安心した妻は甘えるように言いたした。

「それに、庭を何とかしてくださらなきやあ。こんな陰気なのはいや！」

疲れて壁にもたれかかつた妻の膝には、彼と彼の女との愛猫が、しなやかにしのび寄つてのっそりと上つていくところであつた。

「青（猫の名）や。お前は暑苦しいねえ」

と言いながらも、妻はその猫を抱き上げていたのである。彼の家庭には犬がいる。猫がいる。いったん愛するとなると、程度を忘れて溺愛せずにはいられない彼の性質が、やがて彼らの家庭の習慣になつて、彼も彼の妻も人に物言うように、犬と猫とに言いかけるのが常であつた……。